第4章　特定地域に関する個別的検討

ここでは調査対象地域のうち、犯罪発生や居住環境に特徴がみられるいくつかの町丁目について、所轄担当官に対する面接調査や、現地実査の結果を含めて個別に検討していく。

1　A町1丁目

駅前徒歩圏に位置しているこの町丁目では、６罪種すべての不安感が大きく、ひったくりや性犯の認知件数の人口比が多くなっている。図４－１－１にみられるように、駅前商店街の中に、集合住宅が混在しており、このような賃貸集合住宅に一人暮らしをしている者の割合が高い。これらの居住者は地域に親類や友人が少ない者が多く、地域の役職経験も少ないことから、地域問題を自ら解決していく能力が低いという自己評価につながっている。

図4－1－1　A町1丁目(1)

また、図４－１－２のとおり、駅前商店街では、規制を無視した駐輪や自転車の乗り捨てがみられ、こうした状態に対して住民が「地域安全活動が低調である」「警察官のパトロールが不十分」という評価を行っていると考えられる。商店街を備えた駅前は、生活の利便性が高い一方で多数の非居住者が駅を利用することにより匿名性も高く、犯罪に対す

る不安感を増大させている。所轄担当官によると、この地域の地域安全活動は必ずしも低調とはいえず、参加者と非参加者の認識のギャップが大きくなっているのではないかという指摘があった。

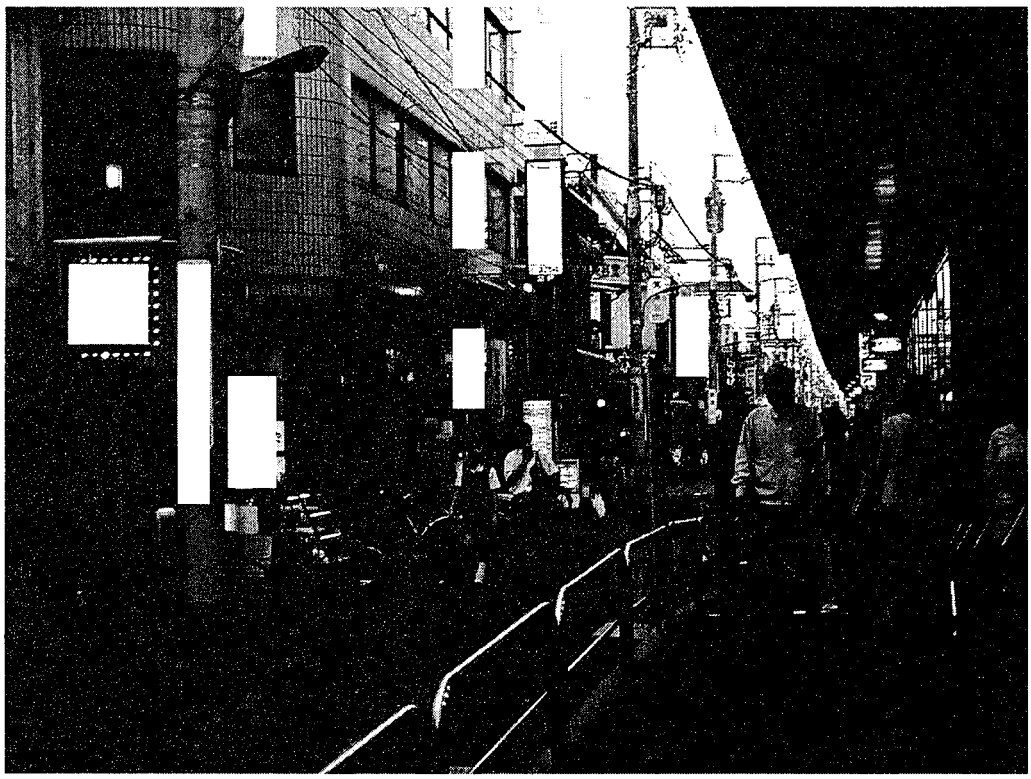

図4－1－2　A町1丁目(2)

一方この町丁目の中には、比較的よく整備されている大規模な公園があるが、図4－1－3にみられるとおり、周囲は集合住宅で日中は仕事のため留守にしている世帯が多いため、監視性が低いことが住民調査から明らかになっている。公園整備については特に企画・設計の段階で、単に公園の内部だけではなく、周辺環境の要因も踏まえた上で、防犯面の配慮がなされるべきであろう。

図4－1－3　A町1丁目(3)

2　B町2丁目・3丁目・5丁目

B町については、その2丁目・3丁目・5丁目という3つの町丁目を取り上げるが、それぞれ少しずつ地域の状況が違っている。

まずB町2丁目については、賃貸の集合住宅に居住している住民の割合が高く、防犯パトロール等の地域安全活動に参加している住民の割合が比較的高い。地域安全活動が組織的行われていることについては、所轄担当官も把握しており、強い印象を持っている。3丁目については、一戸建ての住宅の割合が高い。ここでは住民間のまとまりが比較的悪く、地域安全活動に関する話題が住民の会話に出ることも少ない。また警察の情報提供が不十分であると感じている住民の割合が比較的高い。5丁目については人口が少ないこともあり、地域内での友人が少ない者の割合が高く、自治会活動も低調となっている。地域への愛着感も低い。所轄担当官によると、5丁目自治会は防犯協会に加盟していないため、状況の把握は難しいが、活動は全般に活発ではない。

次に犯罪発生等についてまとめておく。2丁目ではバンダリズムの自己報告の被害や、乗り物盗・バンダリスムの被害の伝聞が多くなっている。特にバンダリズムの自己報告被害についてみると、調査対象地域内で被害率が最も高い町丁目の一つである。実際、町丁目内の団地に隣接した公園では、**図4－2－1**にみられるようなバンダリズムが放置されている。3丁目では、2丁目と同様にバンダリズム被害の自己報告や伝聞が多いのに加え、

無断侵入の自己報告被害についても調査対象地域内で最も被害率が高くなっている。また凶悪事件の伝聞があったとした者の割合も高いが、これについては、所轄担当官からB町２丁目の商店街のパチンコ店で発生した強盗事件のことではないかという指摘を受けた（図４－２－２）。

図4－2－1　B町2丁目(1)

なお、このパチンコ店周辺の町丁目の境界が、侵入盗の犯罪多発地域（ホットスポット）の一つとなっている（図４－２－３、カラーの図は巻末に添付）。自らが居住する町丁目ではない場所で発生した事件であったも、それが近隣であり、発生した事件が重大なものであれば、居住環境の認知に対して影響を持つことになる。また一見、歩車道の区別が整然としてよく管理された道路であっても、犯罪現場となることがある。図４－２－４は、ひったくり事件の現場を撮影したものであるが、団地の境界となっているこの道路は監視性が低く、また道路形状（カーブ）によって逃走が容易になっている感がある。この点では５丁目においても同様の事例がみられた。図４－２－５は、町丁目で最も広い道路の一つで、画面中央にスーパーマーケットがある。ここでもひったくり事件が発生している。５丁目はひったくりの人口比認知件数が最も高い町丁目であるが、このほかにも無断侵入の自己報告被害率が高くなっている。